



山口誓子は写生文をどう読んだか : 「かけはしの記」「はて知らずの記」を中心に (資料紹介)

都田, 康仁

(Citation)

國文論叢別冊, 1:74-82

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483218>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483218>



■資料紹介

山口誓子は写生文をどう読んだか

―「かけはしの記」「はて知らずの記」を中心に―

都 田 康 仁

一、はじめに

山口誓子記念館は二〇〇一年に設立され、所蔵する「誓子・波津女俳句俳諧文庫」には誓子夫妻の遺品や遺稿、蔵書のほか、俳諧や俳句に関する研究図書が収められている。

本稿では、同文庫に所蔵されている誓子の旧蔵書のうち、特に『子規全集 第十卷』（改造社、一九二九年一〇月）所収の紀行文作品、「かけはしの記」（初出『日本』一八九二年五月二七日～六月四日）および「はて知らずの記」（初出『日本』一八九三年七月二三日～九月一〇日）に残された誓子による書き入れを紹介し、誓子が写生文をどのように読んだか、その一端を窺いたい。

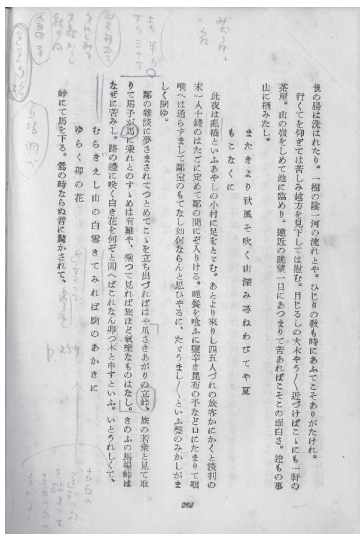
二、「かけはしの記」への書き入れ

「かけはしの記」は、子規が一八九一年六月に木曾路を通つて帰郷した際の紀行文である。残された誓子の書き入れを見ると、地名の箇所傍線が、その上の余白に○あるいは◎が付されている。また、夜になった箇所には「夜」というメモがある。この書き入

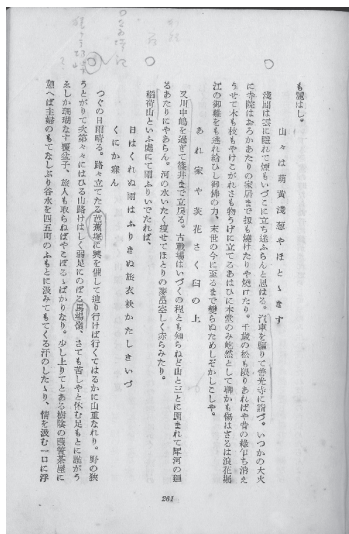
れは文章全体を通して見られ、紀行文を読む上で場所移動や時間経過に注意を払っていたことが窺える。

『子規全集 第十卷』二六一頁上の「翁墳記」、二六二頁上の「芭蕉句碑」、二六三頁上の「玉木屋源蔵」、二六五頁上の「更科の記前後す」、二六九頁上の「改正道中記記載」などは、誓子が子規の「かけはしの記」の行程について解説した「翁墳」（『馬酔木』一九四三年十一月）の内容と重複しており、執筆の際に書き入れたものだと推測される。

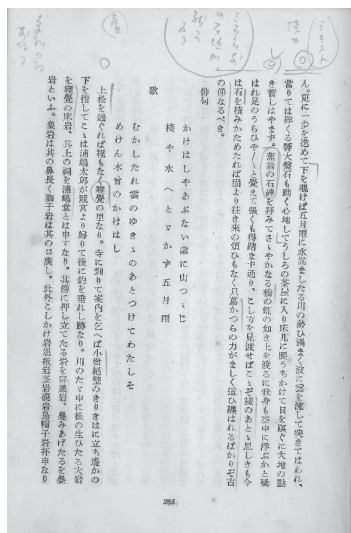
その他、二六〇頁には「虚子との比較」といった書き入れがある。これは、誓子が本作と高浜虚子「木曾路の記」（一八九四年）における行程と比較を行ったことを示している。同じく誓子旧蔵書の『高浜虚子全集 第六卷』（改造社、一九三五年三月）のなかの「木曾路の記」にも、子規作品との対照を行った形跡が窺われる。



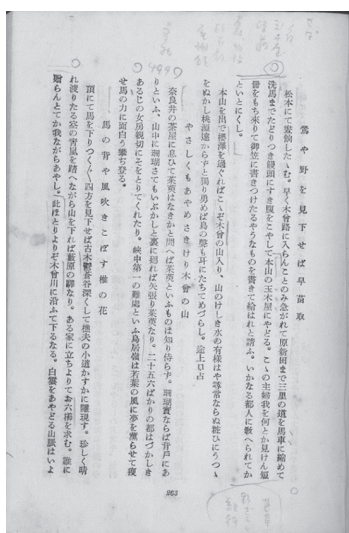
「かけはしの記」より（同書262頁）
〔提供〕神戸大学山口誓子記念館



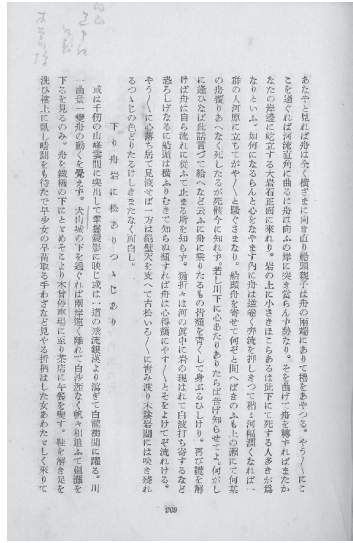
「かけはしの記」より
（『子規全集 第十巻』261頁）
〔提供〕神戸大学山口誓子記念館



「かけはしの記」より（同書265頁）
〔提供〕神戸大学山口誓子記念館



「かけはしの記」より（同書263頁）
〔提供〕神戸大学山口誓子記念館



「かけはしの記」より（同書269頁）
〔提供〕 神戸大学山口誓子記念館

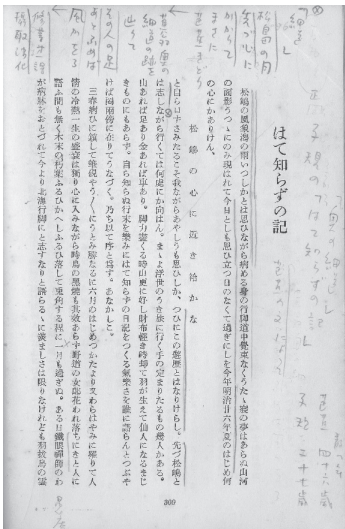
三、「はて知らずの記」への書き入れ

「はて知らずの記」は、子規が一八九三年七月から八月にかけて東北へと旅した際の紀行文である。誓子は「かけはしの記」と同様に地名の箇所傍線を引いており、さらにその箇所の下の余白に地名をメモしている。また、日付が出てくる箇所の上の余白には日付をメモしている。

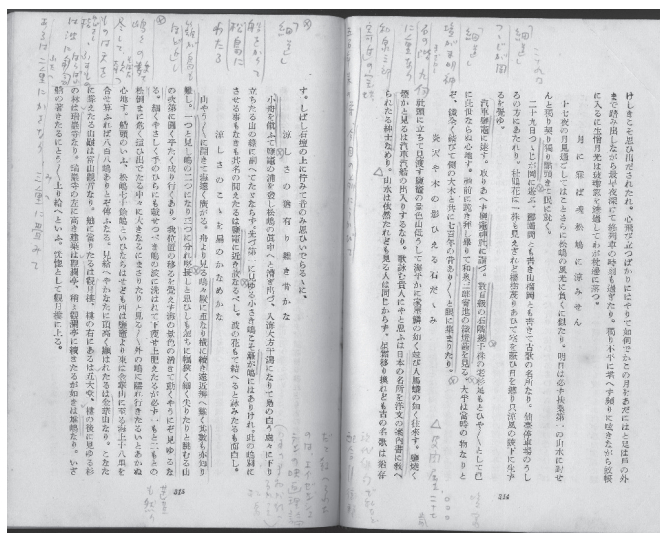
この文章への書き入れでは、芭蕉の『奥の細道』との比較対象を行っている点が注目される。『子規全集 第十巻』三〇〇頁には「正岡子規の『奥の細道』」という書き入れの他に、「芭蕉 四十六歳」「子規 二十七歳」というように年齢の比較もなされている。本文には傍線とともに⊗のマークを書き入れている箇所が多々見られる。その箇所付近の余白には同じマークとともに『奥の細道』

における類似の記述が書き入れられている。誓子には、子規の旅程を芭蕉のものと比較した「奥羽行」「子規諸文」創元社、一九四六年三月）があり、その際にこれらの書き入れが行われたと推測される。

『子規全集 第十巻』三一四―三一五頁では、塩竈神社の場面の「歌詠も貴人にと思ふは日本の名所を洋文の案内書に教へられたる紳士なめり。山水は依然たれども見る人は同じからず」の箇所に△をマークし、余白に「△皮肉屋 二十七歳」と、その横には「現代俳句で私など配合」衝撃だと教へられたのは、エイゼンシュテンの映画理論（日本の書物が教へなかつた）」と書き込まれている。誓子のいわゆる「二物衝突」「写生構成」などの俳句理論が映画の影響によって生まれていることは知られているが、ここには、西洋の書物によって日本のことを学ぶ人への子規の皮肉を、西洋



「はて知らずの記」より（同書300頁）
〔提供〕 神戸大学山口誓子記念館



「はて知らずの記」より（同書314～315頁）
〔提供〕 神戸大学山口誓子記念館

の映画によって俳句理論を学んだ誓子自身に自嘲的にあてはめる姿が透かし見られる。

四、誓子の写生文観

誓子が「かけはしの記」や「はて知らずの記」に関して言及を行っている文章は、「翁墳」（前掲）や「奥羽行」（前掲）のほかにもある。「子規の文章」（『短歌』一九六九年九月）がそれであり、ここには誓子の写生文観がまとまった形で提示されている。誓子とはここで、写生文の理論的主張と目されることの多い子規の「叙事文」（『日本附録週報』一九〇〇年一月／三月）の中の須磨についての文例をもとに、写生文を「有のまま見たままを模写し、読者をして作者と同一の位置に立たしめる」、「修飾もなければ、誇張もない」ものとして捉え、子規の言葉を借りて「時間的な部分の細叙」をその要件として見ている。

しかし、そこで誓子は「この文章に子規の個性的なものが感じられるかどうか」と疑問を呈し、「文章に於ける個性的なものとは何だらうか」と問題を提起する。誓子は、子規の「病牀六尺」第四三回より「まだ見たことのない場所を実際見た如くに其人に感ぜしめようと云ふには其地の写真を見せるのが第一であるが（それも）複雑な場所はとて一枚の写真ではわからぬから幾枚かの写真を順序立て、見せる様にするとわかるであらう」、「地図を附けて其中にあるそれ／＼の写真の位置と方位とを知らしむる様にしたらば非常に有益であらうと思ふ」という箇所を引き、「写生文は時間的な部分の細叙と全体の地勢とをミックスすべきである」とまとめ、そこに「写生文の理想の姿」を見出ししている。つまり、

「時間的な部分の細叙」を統合し、「全体の地勢」を把握するための視点こそを、「文章に於ける個性的なもの」として重要視するのである。

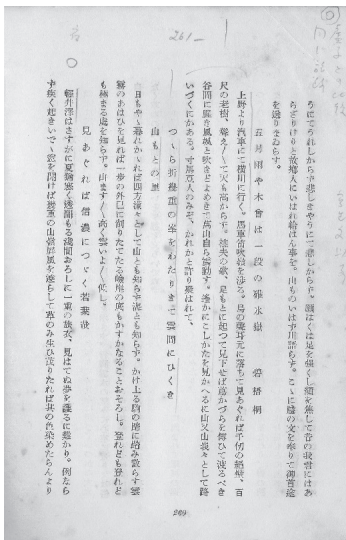
「時間的な部分の細叙と全体の地勢」の「ミックス」を「理想の姿」とする誓子の写生文観は、前節までに見た「かけはしの記」「はて知らずの記」の書き入れの特徴とも通底している。丹念に地名や時間経過をチェックした形跡は「子規の文章」以前の「翁墳」や「奥羽行」によるものかもしれないが、このような写生文観を可能にする地理的かつ時間的な把握の証であったといえよう。

「子規の文章」に戻ると、誓子はそこから自身の求める「理想」を体現する作品を求めていく。「高浜虚子は、(中略)『虚子全集』(改造社版)第六巻の序において、紀行が写生文の中で重要な位置を占むることを指摘してゐる。それなら紀行によつて文章を語ることは見当違ひではない」と述べる誓子は、虚子の序文の「日記紀行といふ集を編むとなつて、それに輯録するものを調べて見ると、殆ど写生文の多くは其中に入れてよいやうなわけになる」といった言葉をいささか拡大解釈する形で、紀行を写生文の中心に据えて検討している。

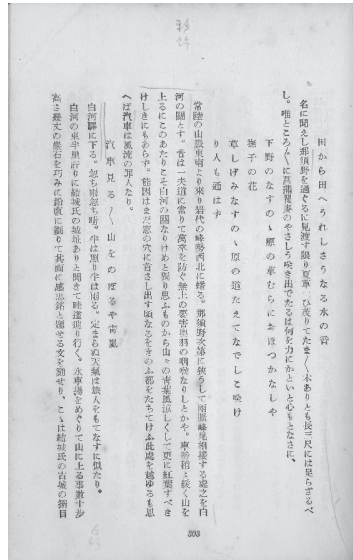
相馬庸郎が「子規の散文文学革新運動は、あるときは随想風であつたり、あるときは紀行文風、またあるときは日記風であつたりする《小品文》においておこなわれた」と述べるように、「写生文」とはそれらの多様な文章を包含する曖昧なジャンルに他ならない。そのなかに紀行が占める割合は大きいとはいへ、紀行に限定して写生文の「理想」を検討する誓子の立場はやや特異なものである。誓子はその立場を取ることで、写生文という枠組みから

はほとんど顧みられていない子規の初期の紀行文から、その後の作品までを連続的に検討することを可能にしているのである。

「かけはしの記」については、「上野より汽車にて横川に行く。馬車笛吹嶺を渉る。鳥の声耳元に落ちて見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え聳えて天も高からず。樵夫の歌、足もとに起つて見下せば蔦かづらを伝ひて渡るべき谷間に腥き風颯と吹きどよめきて高山自ら震動す。遙かにこしかたを見かへるに山又山袈々として路いづくにかある」(『子規全集 第十巻』二六〇頁)という箇所を引用し、「むつかしい漢語が用ゐられ、修飾があり、誇張がある」と評する。旧蔵書には、この引用箇所の右余白に「写生文以前」という書き入れが残されており、「子規の文章」を執筆する際に加えられた書き入れであると推察される。誓子の評価によれば、「かけはしの記」は「時間的な部分の細叙」に必要となる



「かけはしの記」より (同書260頁)
〔提供〕 神戸大学山口誓子記念館



「かけはしの記」より（同書303頁）
〔提供〕 神戸大学山口誓子記念館

「修飾もなければ誇張もない」という要件を満たしていないのである。

続く「はて知らずの記」では、「常磐の山脈東南より来り岩代の峰勢西北に蟠る。那須野次第に狭うして両脈峰尾相接する処之を白河の関とす。昔は一夫道に当りて万卒を防ぐ無上の要害奥羽の咽喉なりしとかや。車勢稍と緩く山を上るにこのあたりこそ白河の関なりけめと独り思ふ」（『子規全集 第十巻』三〇三頁）という箇所を引用し、「地勢の叙述はあるが、依然として粉飾の文章である」と評する。誓子の旧蔵書には引用箇所の上余白に「粉飾」という書き入れがある。三三四頁の上余白にも同様に「粉飾」とある。「はて知らずの記」には、写生文の要件のうち「全体の地勢」はあっても、「部分の細叙」はないのである。

「道灌山」（『日本』一八九九年一〇月）については「地勢の叙述

はあるけれども、部分の細叙はない」とし、「車上の春光」（『ホトトギス』一九〇〇年七月）については「部分の細叙」は、たしかにある。細か過ぎる程ある。しかし「全体の地勢」に相当するものが欠けてゐる」と評している。こうした分析にもとづいて、「子規の紀行をすこし見たが、「時間的な部分の細叙」と「全体の地勢」とがうまくミックスされてゐない」と誓子は総括している。

その上で誓子が最後に取り上げるのが、高浜虚子『俳句と自分』（実業之日本社、一九一五年）所収の「北陸旅行」（原題「北陸旅行の句と事」『ホトトギス』一九一三年二月）である。『俳句と自分』の誓子旧蔵書は誓子・波津女俳句俳諧文庫には所蔵されておらず、書き入れ等は確認できない。

小諸から又汽車に乗った。汽車は千曲川と共に北佐久の高原から善光寺平に奔注して下つて行くのであつた。善光寺平も之を越後の平原に比べればなほ（↓尚）遙に高地であるが、佐久の高原に比べ（↓ぶ）れば遙に低地となつてをる。それ（↓其）につけても武蔵野の平原と佐久の高原の繋ぎ目になつてゐる碓氷、荒舟の峻坂は想像に余りあるものである。（二三八頁）

柏原は信越の境の分水嶺で、「先に」千曲川と共に佐久の高原から善光寺平に奔注して来た汽車は、更に又柏原迄登り詰めて、ここ（↓、）から再び越後の平原に向つて二度目の奔注を試みるのである。（二四一頁）

汽車は柏原、田口の間の分水嶺を通過してから非常な勢で越後の平原目掛けて奔り下るのであつた。広々とした稲穂が

目の前に展開せられた。たしかにそれ〔其〕は日本海と思はるる（「↓」）一抹の水が雲際に眺められた。北佐久の高原からいふと汽車は二度段を下つて初めて越後の平原に這入つたのであつた。（二五〇—二五二頁）

右の三箇所を引用する誓子は次のように評する。

日附の異なるこの三つの文章を連続して並べて見ると、汽車が高きより低きへ移つて行く勢ひがさながらに書かれてゐる。

部分の叙述を連続せしめつつ、それを「奔注」という二字で貫いてゐる。汽車の移り行く勢ひはこの「奔注」の二字から感じられるし、作者の捉へた強い力も感じられる。

虚子の文章によつて私は汽車の通過する部分の位置と方位を知り、全過程を知るのである。ここに写生文の理想の姿がある。

誓子によれば、右の虚子作品では、走る汽車の勢いを捉えるべく用いられた「奔注」という特異な語が部分と全体の叙述のバランスを担保している。写生文の「理想」となる「部分の細叙」と「全体の地勢」の「ミックス」を可能にする「個性」とは、このような言葉のレベルにおいて見出されるものだったのである。

注目すべきは、その後である。誓子は同じく『俳句と自分』の「其後の句作」（初出『ホトトギス』一九二三年五月）の中で、虚子が「外海や小さき湾に潮千人」という句について、「所謂鳥瞰

図。作者は神様の如くなつて遙に大空より見下してゐるやうな心持」と鑑賞していることを取り上げる。これを踏まえ、「俳句においてもさうだが、文章においても作者は「神の如く」にならなくてはならぬのである」と述べる。誓子は、そのような「作者」の「個性」が俳句と文章のいずれにも不可欠だと認識しているのである。

五、おわりに

青木亮人が「子規や虚子、碧梧桐は絵画を参照して「写生」を定義付けたが、昭和の誓子が参照したのは映画であつた」とし、その試みを「子規が切り開き、虚子が発展させた「客観写生」（碧梧桐と異なり、有季定型という枷を前提とする「写生」）をより洗練させたもの」と評価しているように、誓子における「写生」の問題については、専ら俳句と映画理論との関係が多く論じられてきた。⁽⁴⁾しかし旧蔵書の書き入れや、それらを踏まえた誓子自身の言説を精査してゆけば、誓子が子規や虚子から俳句のみではなく写生文についても多くを作品から学んでいたことが見えてくる。

誓子は「写生論の変遷」（『俳句研究』一九三四年二月）のなかでも「子規の写生論」を考察し、「正系的な俳句写生論が菌痒ゆい程体を為して」おらず、「寧ろ傍系的な文章写生論の方が体を為してゐたりする」と、「子規の写生論を探索者」はその「中核」である「文章写生論」こそを解説しなければならぬと述べる。「ヘミングウェイと子規」（『俳句』一九六二年九月）でも同様に「その写生説は絵画―俳句―短歌―叙事文を通して展開された。それ等異なるジャンルを通過するたびにその説は固められたと云つて

よい」と、俳句や短歌ではなく文章にその終着点を見出しているのである。

「写生論の変遷」が発表された一九三〇年代前半は、誓子の「写生構成」の主張が行われた時期である。「写生構成」（『俳句研究』一九三四年三月）では「いつものことで気が引けるが、私の『詩の方法』は「写生構成」である」と述べ、「写生」とは「現実の尊重」／「構成」とは「世界の創造」と、自身の方法を解説する。この論にも見られるように「写生構成」は「現実をありの儘に直叙すればよかつた」という「写生至上主義者」への批判的立場のもとに説かれた。「雑詠句評会」（『ホトトギス』一九二五年二月）では、「い、芸術作品に於てはその個々の描写は各々個性を表はしながら、全体の統一を目指して居ります。（中略）この全体の統一が、とりもなほさず、作家の人格であつて、私はこの句に即して作家の人格に触れ得た気が致します」と「写生構成」に結びつく考え方を「個性」「作家の人格」といった言葉を用いて説明している。⁽⁵⁾これは、本稿で見てきた「部分の細叙」と「全体の地勢」の「ミックス」を求め、そこに「個性」を見る誓子の写生文観とも通底している。

一九三五年までの誓子の子規理解を論じた柴田奈美は、「誓子は子規のいう「写生」を「デッサン」「クロッキー」のレベルにとどまるものと認識していた。（中略）これは、自分の「写生」——「構成」——「客観的描写」という自説を主張するために、「写生」をデッサンレベルとして規定しようという意図があったためだと考える」と述べる。そうであれば、子規の写生論を俳句だけでなく文章まで広げて読み返し、自身の「写生構成」に近いものとして

捉え返したものが、本稿で紹介した誓子の写生文の読み方であり、一九六九年の「子規の文章」に結実する誓子の写生文観であったといえよう。「理想」を虚子の作品に見出していることも含め、このことは一九三〇年代から後年にかけての誓子の俳句理論を見直す端緒となりうるだろう。

* 山口誓子の文章の引用は『山口誓子全集』（明治書院、一九七七年一月～一〇月）に、全集未収録のものは初出および単行本に拠る。なお、誓子の文章中の引用の原文との相違は「」で示した。

注

(1) 例えば、今泉康弘「隠喩としての映画——山口誓子と「モニター」ジュ構成」『日本文学誌要』法政大学国文学会、二〇〇三年七月。

(2) 誓子旧蔵書の『高浜虚子全集 第六卷』（改造社、一九三五年三月）の序文には、「写生文の多くは其中に入れてよい」、「写生文といふ項目の中に収めた方が寧ろ適切ではないか」という箇所傍線が引かれている。

(3) 相馬庸郎「創始期の写生文」（原題「写生文の検討——正岡子規の場合——」『明治の文学Ⅱ』至文堂、一九七五年三月）『子規・虚子・碧梧桐——写生文派文学論』洋々社、一九八六年七月、三八頁。

(4) 青木亮人「その眼、「写生」につき——近代俳句を一望する——」『ユリイカ』二〇一一年一〇月↓『その眼、俳人につき 正岡子規、高浜虚子から平成まで』邑書林、二〇一三年九月、三〇頁。

(5) 柴田奈美「誓子と子規——初学の誓子の子規理解——」（『岡山県

立大学短期大学部研究紀要『一九九七年三月』は、誓子のこの発言について「昭和六年から、誓子は「写生構成」論をしばしば説いているが、その端緒がここに見られる」と述べている。

(6) 柴田奈美「誓子と子規——初学の誓子の子規理解——」前掲。

〔付記〕本稿執筆にあたり、神戸大学山口誓子記念館「誓子・波津女俳句俳諧文庫」の閲覧及び調査等を快諾いただいた山口誓子学術振興基金実行委員会委員長寺内直子氏、書き入れの判読にご協力いただいた米田恵子氏、調査を補助していただいた有澤知世氏に深謝し上げる。なお、今回の資料調査は、ロバートキャンベル氏による第32回山口誓子学術振興基金講演「その人の足あととふめば風薫る 山口誓子と正岡子規」に伴うワークショップの事前準備のために行った。執筆に際しては、JSPS 科研費 JP23K11554 の助成を受けた。

(みやこだ やすひと／日本学術振興会特別研究員DC2)